

「字幕・新時代」の到来

テレビ CM 字幕にみる社会・文化のユニバーサル・デザイン

○津田塾大学 柴田邦臣
(株)博報堂 井上滋樹
岩手県立大学 吉田仁美

1 目的

これまで、字幕 (Closed Caption) は、聴覚障害者のためのものと、思われてきた。しかし見渡してみると、映画の字幕や、電車の広告画面、さらには Web 上など、さまざまなかたちで「動画に文字を重ねて表現する」という形式が散見されている。それでも「字幕」というと、台詞や BGM が聞こえる“普通の人”には、画面を常に占有する邪魔なものだと思っている人が多いかもしれない。にもかかわらず、テレビのバラエティでのテロップや、動画サイトでのコメント機能など、字幕に類するような表現形態が増えているような現状に、社会的な意味を見いだす事はできないだろうか。

本報告の目的は、これまで限定的に考えられてきた「字幕表現」を、社会学的に視野を広げて考えることで、聴覚障害など特定の層に対する情報保障というだけでなく、より幅広いユーザーにむけたテクノロジーであり、表現の革新とでもいうべき意味を持っていることを指摘する点にある。それは、ユニバーサル・デザインが単なるハードウェアやソフトウェアの設計上の課題ではなく、文化表現や社会的コミュニケーションの問題であることを、示す作業となるだろう。

2 方法

以上の目的のために本報告は、博報堂ユニバーサル・デザイン (当時) が、大妻女子大学と共同で実施した『字幕付きテレビ CM についての調査』 (2012 年・調査 1) を分析した。この調査は全国 900 人 (聴覚障害者: 100 人, 非障害者 800 人) を対象にしたもので、Web 調査ではあるものの「字幕利用」としては国内で初めての全国調査である。また調査 1 の結果を活かすため、難聴者 (身体障害 3~6 級) および高齢者へ半構造化インタビューを実施した (2012 年・調査 2)。その成果は柴田・吉田・井上(2014)として上梓されるが、本報告はそれを元に議論を深めるものである。

3 結果・結論

調査 1 の結果、聴覚障害がなくても、字幕を積極的に評価する層があり、その割合は 60 歳以上では 50%を超えていることがわかった。字幕やメディア利用のありかたは、難聴者/健常者で異なるのではなく、そのコミュニケーションの必要性によって異なる。そこで調査 2 の分析を深めると、情報の説明やわかりやすさという点で、字幕が予想以上の効果を上げていることがわかった。一方で、表現としての課題も浮かび上がったが、詳細は口頭報告にて補足される。

結果をまとめると、字幕は聴覚障害・難聴向けの情報支援だけではなく、高齢者を含めた幅広い層の情報の理解を支えるユニバーサル・デザインとして機能することがわかる。しかしそのためには、「映像に文字を重ねる」という表現そのものが、コミュニケーションのチャンネルを増やして受け手の理解を支えうるという効果を自覚し、それを織り込んだ映像表現と、それを受け入れる社会的な理解が必要になる。社会・文化的な意味で、ユニバーサルデザインを再解釈する可能性が開かれている。

文献

Jensema, Carl J., and Burch, Robb., 1999, "Caption Speed and Viewer Comprehension of Television Programs".

柴田邦臣・吉田仁美・井上滋樹, 2014, 『字幕・新時代の到来——テレビ CM をユニバーサル・デザインとして考える——』青弓社。